

NPOが大学と連携することの意義

ー東北学院大学「ボランティア活動」への取り組みー

特定非営利活動法人グループゆう 中村祥子

1. グループゆうの活動の経緯

NPO法人グループゆうは、仙台市の泉区に活動拠点を持つ団体で、「どんなハンディーキャップを持っても住みなれた地域でだれもが自分らしく生きていくことのできる社会作り」を目的に、“あったらいいな”と思うサービスを市民参加で作っているNPO団体である。構成メンバーは、19歳から72歳までの会員80名で、そのうち13名が男性である。会員は、スタッフまたはボランティアのどちらかを選択して活動に係わることになるが、スタッフは22名で、その内8名が常勤である。また、会員以外に、学生がボランティアとして活動を支援している。

前身は“食生活”と“環境”をテーマに活動していたみやぎ生協の地域活動グループである。女性18名が月に1回、食生活の学習や調理実習、さらには休耕田を借りての大豆栽培、農家の女性たちが作る麴を購入しての味噌作り、農業と環境のかかわりについての学習活動を行っていた。そのような中で、会員自身に介護問題が身近にせまってきたことがきっかけとなって、メンバー達はこれまでの個人の学習の蓄積を地域のサービス作りに活かすことが出来ないかと模索し始めた。そして1995年、生協の枠をはずしたボランティア団体・グループゆうを組織し、仙台市の助成を得て「配食サービス」を始めた。活動を通じて個人や団体とのネットワークが広がり、市民のニーズも見えてきた。「サロン」「助け合い」が加わり、サービスのメニューが広がった。そうすると係わる人の層も広がって多様な交流が始まり、また新たなニーズが見えてくる。「介護保険」「支援費事業」を新たにはじめ、サービスのメニューがさらに広がった。

2000年には、活動の継続性を確かなものにするためにNPO法人格を取得した。2001年には、障がいのある学童の遊び場「ピーターパン」の活動が加わり、グループゆうのボランティア層が大きく変わった。中学生、高校生、大学生の若い世代の参加がこれまで以上に増えたのである。

2. 東北学院大学「ボランティア活動」受け入れのきっかけと期待

東北学院大学の授業としてのボランティア活動を受け入れたきっかけは、配食サービスを通じて連携していた市民団体NALCからの情報だった。東北学院大学が学生のボランティア体験を受け入れる団体を求めていると聞いて、グループゆうもその選択肢の一つになりたいと申し出た。担当の水谷先生に、グループゆうが所属する“食事サービスネットワークみやぎ”の調査活動でアドバイスをいただいた経緯があったことが、手をあげる勇氣に繋がった。

若者にグループゆうでボランティアを体験してもらいたいと思った理由はいくつもある。グループゆうには、市民がエンパワーメントしていくことを支援するという大切な使命があり、多様な市民に参加の場を開いてきた。特に、これからの社会概念を作っていく若者に体験の場を開き、障がい差別のない社会作りに貢献してもらいたいという期待が大きかった。

グループゆうが次世代の若者を受け入れ、彼らに提供できることとして、次のものが考えられた。

- ① ボランティア・NPOを体験的に理解する機会
- ② 高齢・障がいを理解する機会
- ③ 社会貢献の場

これらの中で、特に授業としてのボランティア活動では、ボランティアを体験的に理解してもらい、②障がい理解をすすめる、という2点が大きい。ボランティア活動の体験的理解に関しては、大学生はマネジメントする側に興味をもつ場合が多く、これまでもそれに関わる卒業論文やゼミの調査研究の申込みがあった。しかし、そのような大学生の話を知っていると、ボランティアを一度も体験した事のない人が多い。ボランティアしたことのない人がマネジメントすることや、そのあり方を考えることは不可能である。このような経験から、ボランティアを実践する場を提供する必要があると感じていた。

障がい理解に関しては、障がいを持つ子どもの放課後クラブピーターパンでの次のような経験がある。ピーターパンは、地域の普通の家を拠点に活動をはじめた。そこで、子どもの戸外での雨の日の遊びや衣類を脱いでしまう（半身であるが）行為、嬉しいとき怒った時の抑制のきかない声等が、隣近所の方に苦痛を与えてしまった。私たちが障がいの特

性を十分に説明できなかつたも一因であるが、やはりまだまだ差別のある現実を見た思いがした。現在ピーターパンは活動拠点を移し、地域に受け入れられて継続しているものの、社会への障がい理解をすすめる必要を強く感じた。そのような差別は、健常と障がいがかかれて育った歴史による、障がいへの理解不足が原因の一つであるが、今後、障がい者は施設で過ごすことが当然で地域で普通に過ごすことが特別である、とみる社会通念を変えていくねばり強い働きかけが必要であると思う。

また、学生がボランティア体験を通して得られることがらとして、次のものを想定した。

- ① 体験した事のない活動への参加経験
- ② 一人の市民としての社会参加・参画の経験
- ③ 自己実現の機会・喜ばれる体験、役立つ充実感、自分の知らなかった能力の気付き
- ④ 多様な人との出会い

3. ボランティア活動の内容

ボランティア体験メニューは、「配食サービス」、「交流サロン」、「ピーターパン」、「ネットワーク活動・事務」の4種類である。表1に具体的な内容を示しているが、学生は、これらのなかから、自らの興味・関心と時間的な都合にあわせて選択し活動を行う。

4. 取り組みの成果

(1) 学校が仲介することの意味

ボランティア活動はボランティア「する側」と「受ける側」の相互の求め合いから成立するのだが、今回の「ボランティア活動」は、仕掛け人に大学とグループゆうが加わった四者の協働といえるだろう。サービス利用者の満足とボランティアの充実に加え、グループゆうと大学という仲介者がそれぞれの使命を果たす事ができて、協働は成果を生むことができる。

表1 グループゆうの活動とボランティアの内容

種類	活動時間	活動内容	ボランティア内容
配食サービス	調理 月～日 8:00～17:00	高齢者・障害者・介護者への調理・配食サービス	・弁当の調理・盛り付け ・弁当箱の洗浄
	配達 夕食 土・日 14:30～16:30 昼食 月～金 10:00～12:00		・弁当の配達 ・会話
交流サロン	「さろん・ど・ゆう」 月～金 13:00～16:00 ・企画により土日も開所	食事と喫茶のある交流の場作り ・会食，喫茶 ・趣味の作品展 ・介護保険のはなし ・音楽を楽しむ会 ・ガーデニング ・得意料理	・会食会の接客，話し相手 ・イベントの企画・運営 (企画・広報・集客・当日運営)
・ピーターパン	月～金 14:00～18:00 (延長19:00まで) ・土曜日活動がある時もある	障がいをもつ子供等の放課後，長期休暇の遊び場作り	・子どもの遊び相手，散歩相手，話し相手など ・夏休み企画の手伝い
・事務 ・ネットワーク活動	月～日 9:00～17:00	多様な個人・団体・NPO・行政・企業等との情報交換，連携と協働の推進 ・情報誌の発行 ・イベントの準備・参加	・各種事務 ・情報誌の発行，発送 ・英文和訳 ・ホームページの作成

生徒が学校を經由して参加したケースが，過去に2度あった。最初は，グループゆうの活動拠点がある地域の長命が丘中学校の生徒が，夏休み期間に配食サービスのボランティアを体験する試みで，現在まで6年間続いている。二回目は三重県の霊峰中学校の生徒のケースであった。「ボランティア体験を自分の将来設計の指針にする」という明確な目的を設定した修学旅行の研修先になった。将来，保育や高齢福祉、栄養士等の仕事をしようと考えている中学生が，2年連続して泊り込みでボランティアを体験しにやってきた。

東北学院大学の「ボランティア活動」を受け入れたことで、学校を仲介者として，中学生、高校生、大学生がグループゆうでボランティア体験をしたことになる。一人で自主的にボランティアの対象を探して実践している大学生の中には，ボランティアは“単位”を取る

目的であるものと違う、という意見がある。語源に、“志願兵”があることから想定できるように、自主性こそがボランティアの命なのだが、現実には放課後や休日まで学校の支配が続き、また、自分の力が社会に役立つことを意識しない若者が多い状況の中で、学校の仲介が効を奏することもある。ボランティアすることだけでなく、そこで何を思いその後何をするかが大切である。

(2) 学生にとってのボランティア体験の成果

東北学院大学の学生は、たくさんの活動が盛り込まれた体験メニューをととても真摯にこなし、まず労力の提供をしてくれた。また、ボランティアゆえの何者にも縛られない発言や感想は会員におおいなる刺激をもたらした。そして、食事サービス利用者の高齢者は、いつもの倍の笑顔で若者を受け入れてくれた。

特に、始めて接する人が多い障がいを持つ学童とのコミュニケーションには皆が苦勞していた。ピーターパンでは子供たちはとても正直に感情を行動に表す。お世辞で付き合ってもくれないし笑ってもくれない。学生たちは、どうしたら意志の疎通がはかれるのか、相手を楽しませることができのかを考え、試しては受け入れられずを繰り返すうちに、ある時、子どもの喜びの表現を判読して、ホッと嬉しそうな顔をする。

自分が人に受け入れられる喜びを体感する。そうすると、まったく縁もゆかりもなかった場所に自分の居場所ができる。自己実現の充足がある。

ボランティア体験に対する学生の共通した感想に「ありがとう、と言われて嬉しかった」「自分も役に立っていることを実感した」というものが多かった。彼らのもてる力を自分自身で評価してきていないという現実、発揮する場が地域にない現実を思った。もっともっと活躍できる機会を作るとともに、ボランティアのメニューに関する情報提供が必要であると思った。

(3) 学生受け入れの成果

仲介団体としてのグループゆうの大きな成果は、ボランティア担当の専従を置くことになったことであろう。若者の社会参加の場の提供をかってでたわけであるが、最初の体験がその人の未来になんらかの影響を残すことを考えた時、単なるボランティア体験の場の

提供だけでいいのだろうかと考えた。もてる力を引き出す手伝いが必要であると感じた。そのことがグループゆうのボランティアコーディネーターの配置へとつながった。

グループゆうでは当初、事業別に理事や責任者がボランティアコーディネートを行っていたために、オリエンテーション（団体のミッションや活動の経緯、全体の事業等の方向性を決める情報を伝える機会）の際の内容が事業部署によって異なっていたり、個別の目的に合わせた目標の立て方やボランティア実践後のフォロー、目標の見直し、体験後のフォロー等が不十分であるといった問題が生じていた。多様な世代のボランティア受け入れが必要となった現在、専門のボランティアコーディネーターの配置は、ボランティアとグループゆうの双方にとって、満足のいく活動を進めるためになくはないものであった。

（４）ボランティアマネジメントの変遷と大学への期待

表2のように、東北学院大学のボランティアマネジメントは改善されつつ変化した。専任のボランティアコーディネーターを配置してから、学生の企画立案への参加やボランティア期間の初期および中間段階での個別対応(カウンセリング)が可能になった。ボランテ

表2 ボランティアマネジメントの変遷

年度	2001 (H13)	2002 (H14)	2003 (H15)
活動への参加形態	ボランティア体験	ボランティア体験 ボランティア企画運営	ボランティア体験 ボランティア企画運営
ボランティアメニュー	・配食サービス ・サロン ・ピーターパン ・事務	・配食サービス ・サロン ・ピーターパン ・事務	・配食サービス ・サロン ・ピーターパン ・ボランティア開拓企画
ボランティア担当の配置	・理事 ・各事業担当責任者	・ボランティアコーディネーター ・各事業担当責任者 ・理事	・ボランティアコーディネーター ・各事業担当責任者 ・理事
ボランティアマネジメント	最初・集団 最後・個別 アンケート用紙	最初・集団 毎回・個別 振り返りシート 最後・個別 アンケート用紙	最初・集団 毎回・個別 振り返りシート 中間・集団 ミーティング 最後・個別 アンケート用紙

リア実践後の振り返りや、担当部署の責任者との連携や役割分担を通しての適切な対応ができるようになった。

さて、学校にとってのメリットはどんなものがあったのだろうか。地域に学生を出すことを大学の担当者はとても心配するが、もっと信頼して推進してもいいのではないかと思う。学生を地域に出すことで、地域の教育力を高める効果があるし、知らない世界で活動する機会を与えることで、温室のような学校では得られない学生の自立力を引き出す効果もあるだろう。地域の団体との行き来が社会性を失いつつあると言われている大学を開く力になってくれるのではないかと期待する。

5. 今後に向けて

昨今、学校教育における奉仕活動の義務化が問題になっているが、東北学院大学の「ボランティア活動」は環境整備を仲介者が行ない、選択権が学生にあるユニークな授業企画であると思う。しかも調査研究のデータ収集として係るのではなく、体験を目的としていることに大いなる意義を感じる。

将来的には、いつでも、だれでも、したいときボランティアできる環境整備こそが重要であるが、放課後も学校に所属する生徒が多い義務教育下、学校側の仲介がボランティアの一步を導くことの意義は大きい。

今後、大学においては、場の提供等の大学の支援のもとに、学生の自主組織としてのボランティアセンターが生まれることに期待したい。

市民活動は、市民主体のサービスづくりもさることながら、その過程での自立した市民の育ちの場としての位置付けも大きい。自立した個の共生による、差別のない社会の実現をめざして、真の民主主義の担い手の育成に、今後も大学をはじめ多くの機関や組織と協働を進めて行きたい。

*本稿は、東北・北海道地区大学一般教育研究会第53回大会（日時：平成15年9月11日、会場：東北学院大学）において発表した内容を、一部追加・修正の上まとめたものである。